

J・ロンドンのハンセン病もの短篇群を読む

辻井 榮 滋

I

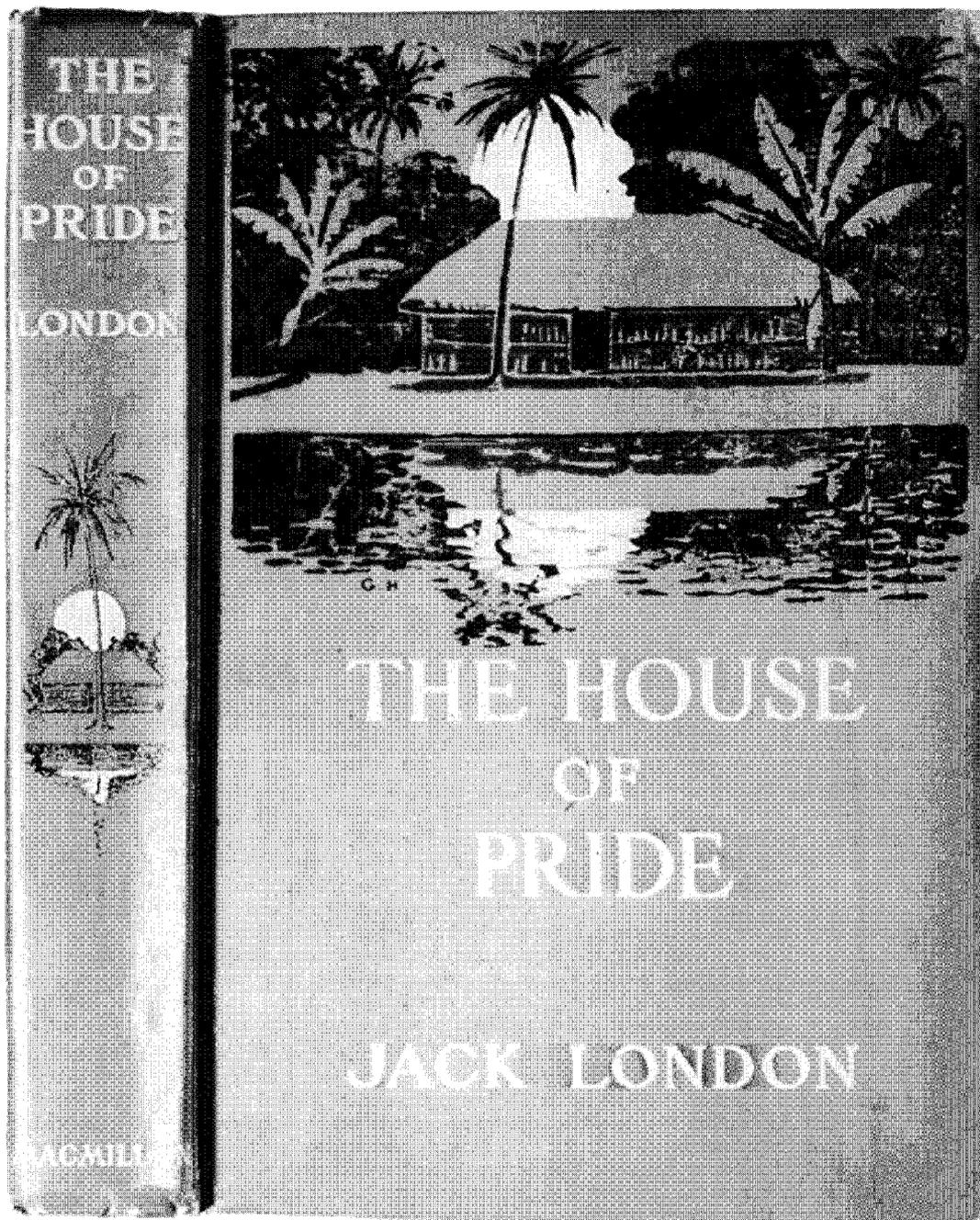
2004年6月に筆者は、「ハンセン病を扱ったJ・ロンドンの2短篇¹⁾」と題して「ハンセン病患者クーラウ」および「さよなら、ジャック」を翻訳し、「訳者ノート」を添えて発表した。その直後には、J・ロンドン(1876-1916)の取りあげる世界の広さや奥行きに驚きの声が多く寄せられた。その後、2007年7月の「ハンセン病問題とジャック・ロンドン²⁾」の発表へとリンクさせたのだが、そこではマクロ的視点に立って、過去から今日に至るハンセン病問題全体を俯瞰し、次第にロンドンが訪ねたハワイはモロカイ島のカラウバパ半島の概況と彼自身の筆になる収容所の実態レポートについて取りあげ、検討を加えたのだった。したがって本稿は、上記2つの仕事と関連しあう、いわば3部作ともいべき最終の作品論ということになるだろうか。

極北の地にあっても、英国の首都の貧民窟潜入時においても、日露戦争の取材に臨んでも、はたまた南太平洋航海時にあっても、その他いつの時も、ロンドンの類いまれなる好奇心・冒険心・探求心・正義感・決断力そして実行力は、ほぼ生涯を通じて衰えを見せることがなかった。勇猛果敢とでも形容すればいいだろうか。赴く先々で貪欲に得た情報を着実に文章化していった、そうした資質というか能力に、われわれはただ舌を巻くしかない。それらの具体例としての『野性の呼び声』『白牙』を始めとするクロナダイクもの、あるいは『どん底の人々』、『アメリカ浮浪期』(*The Road*)等々すべて然りで、数えあげると切りがない。別のジャンルに属する、いわゆる“ハワイ・南太平洋もの”と呼ばれる作品群にしても、無論その例外ではない。

Jack London, who wrote some 14 stories about Hawai'i (plus a large section of his book *The Cruise of the Snark* and more stories about the South Pacific),……³⁾

ハワイだけでも1つのジャンルを成すほどの相当量の仕事を残しているのである。

南太平洋もののほうはともかく、これら10数篇のハワイに関する仕事のうち、本稿で考察しようとするハンセン病患者を扱った短篇小説3篇が収録されているのが、*The House of Pride and Other Tales of Hawaii*である。1912年3月にマクミラン社から出ている。その中身を順に挙げると、“The House of Pride” “Koolau the Leper” “Good-by, Jack” “Aloha Oe” “Chun Ah Chun”そして“The Sheriff of Kona”の計6篇である。ちなみにこの本の装丁は、



A thatched roof house and palm trees at water's edge, with moon in light blue, black and cream white in the background. Same design on both cover and spine.⁴⁾

となっている。具体的なイメージを共有できるように、同書（p.61）掲載の表紙写真をお目にか
けよう。

さて、ロンドンの類いまれなる諸資質のうちでも、冒険心・探求心は図抜けていた。1907年7月2日にモロカイ島のカラウパパに上陸した彼は、さっそく物見遊山やハンセン病患者たちとの交流とともに、ハンセン病に関するリサーチにも余念がなかった。

Jack spends many hours cramming from every book he can find in Doctor Goodhue's huge library on leprosy⁵⁾

そうしたひたむきなリサーチと実地検分とによって、彼はまず“The Lepers of Molokai”と題する詳細なりレポートを *Woman's Home Companion* 誌に発表した（1908年1月⁶⁾）。そして、ハンセン病患者を主人公ないしは真正面に据えた3篇の短篇作品の登場となる。彼自身の書簡（ロンドン夫妻の友人で *Honolulu Advertiser* の記者である Lorrin Thurston に宛てたもの—1910年6月11日付）によっても確認をしておきたい。

I have written three leper stories, every one of which was told me by you Hawaiians — “The Sheriff of Kona,” “Koolau the Leper,” and “Good-by Jack.” And let me tell you that these three are only three out of scores and hundreds of leper stories that were told to me.⁷⁾

II

3篇のうち最初に発表された短篇小説は、“Good-by, Jack”（「さよなら、ジャック」）である。1909年の6月に、*The Red Book Magazine* (Vol. 13, pp. 225-240) に掲載された。妻のチャーマンがこの原稿のタイプをしているのが1908年6月24日⁸⁾であるから、雑誌発表までにちょうど1年を要したことになる。

まず、アーサー・G・デイによる簡潔なストーリーの概略から入ってみよう。

The story “Good-by, Jack” tells of a brilliant young millionaire who is also a brave man, but who at the end suffers a fear a thousand times more hideous than the fear he had endured by the narrator when he sees a writhing centipede.⁹⁾

物語の主人公はジャック・カースデイルとあって、今でいう億万長者で、知識人であり、ハンサムで、勇気のある、いわばハワイにおけるスーパーマン的存在である。この男性が、ドティー・フェアチャイルドという女性の頭髪の中に落ちた大きなムカデに噛まれる——実際に噛まれた——のを恐れずに取ってやった。

それでいてこの男こそは、ドティー・フェアチャイルドの髪にあの身をのたくらせるぞっとする生き物が彼女の目とベストのすき間の上からぶら下がっているのを私が見たときの恐ろ

しさなどよりはるかにすごい恐ろしさに打ちふるえるのを、私が見る^{さだめ}運命にあったのである¹⁰⁾
 〈下線引用者〉

下線部を一読しただけでは何を指すのか読者にはピンとこない。ところが、この直後にハンセン病への言及が始まる。「私はハンセン病に関心があったが、他のあらゆる鳥の問題同様そのことに関して、カースデイルには百科事典的知識があった。……」(p.152) その博学なカースデイルが、語り手の「私」をハンセン病患者たちがモロカイに送られる波止場へと連れだす。彼がマクヴェイ氏と政治談義をしながら波止場を歩いているあいだに、「私」は40人ほどの患者たちのなかのルーシー・モクヌイという絶世の美女で歌手について詳細な説明をジョージズ医師から聞く。その結果「私」は、

深い悲しみに沈みこんでしまった。人生なんて、どうせくだらないものだ。わずか2年足らずでそんなにすばらしい人間が、そのすばらしい成功の絶頂から、モロカイへの移送を待つハンセン病患者の1人になるのだから。(p.155)

と意気消沈してしまう。

そこへカースデイルがもどって来る。出ていく船からルーシーが、彼に向かって「さよなら、ジャック！ さようなら！」と叫ぶ。ここでストーリーは、タイトルとも一致するのである。いかにもお涙ちょうだいのエンディングのようだが、これが当時の現実であったことは間違いない。

時代は少しさかのぼるが、あのダミアン神父の時代に、英国の画家エドワード・クリフフォードのダミアン慰問の記がある。

小さな蒸気船モロカイ号は〔ホノルルを〕5時に、モロカイに向けて出航するので、1888年12月17日に、私は乗り込んだのである。オレンジ色の太陽は落ちかかり、紫の雲を金色に縁取った。波止場には、何人かの患者とその親戚がボートを待っているのが見えた。「ああ、あなた！」と、ひとりの女性は幾度も幾度も泣き叫んでいた。13名の患者はボートに乗り、蒸気船に移った。こうして、われわれは出発した。泣き叫ぶ声は次第に遠ざかり、ついに聞こえなくなってしまった。……¹¹⁾

同書にはまったく別の文脈でも、「死別よりもつらい生き別れのおきて！」「船の内外は、患者家族の生木を裂かれるような嘆きにどよめいた¹²⁾」などの事例が示されている。まさに「さよなら、ジャック」のルーシーその他の患者たちがモロカイへ送られる場面そのままと言ってよい。ロンドン自身が実際に見聞し、そのうえ調べあげる手法の揺るぎなさが見てとれる。

ロンドンが比喩の名手であったことは過去にも何度か例証したが、また比較対照をきわ立たせることにおいても優れた技量を発揮した。スーパーマン的存在感を示すジャック・カースデイルと完璧とも言える容姿・歌唱力を備えたルーシー・モクヌイの2人の描写は、ルーシーにも分け隔てなくハンセン病が襲いかかることによって、急転直下、仰天の悲劇へと導いてしまうという意味においてである。

そういえば、本章の冒頭で紹介したムカデの話（「……私が見たときの恐ろしさなどよりはるかにすごい恐ろしさに打ちふるえるのを、私が見る運命にあつた」）が鮮やかに甦るわけである。ムカデの恐怖とハンセン病の恐怖の対照である。体長が約16センチもあり、しかも、有毒の醜いムカデがドティーに今にも襲いかからんとするところをジャックが身を挺して噛まれながらも払い落とすありさまは、美女ルーシーが感染にはそれこそ手も足も出ないことを重ねあわせるとき、その落差という対照はみごととしか言いようがない。

この作品でもう1点忘れてはならないのは、冒頭にあるように、ハワイにおける白人種すなわち宣教師および商人らによる侵入・略奪が先住民であるカナカ人を絶滅させ、主としてこの両グループがハワイの社会を支配している経緯をきちんと記述している点である。中田幸子氏も、

クック以後白人たちの知るところとなったハワイ諸島も、キリスト教の伝導による恩恵や被害を受ける運命にあつた。ロンドンのハワイ物の1つ「さよなら、ジャック」にこの点が語られている。……¹³⁾

と述べている。そしてジャック・カースデイルこそは、そうした大変な支配力を有する「宣教師の家系の出」(p.149)なのである。この作品で重要且つ皮肉な点は、そのオールマイティと言える役をもってしても、この時代にあつてはまったくの無力感を露呈せざるを得ないというエンディングに、ハンセン病の恐ろしく痛ましい悲劇の実態があつたということである。

III

雑誌に2番めに発表されたハンセン病ものは、“The Sheriff of Kona”（「コナの郡保安官」）である。1909年8月に、*The American Magazine* (Vol. 68, pp. 384-391) に掲載された。

コナは、ハワイ諸島のなかで最大の島ハワイ島の西岸にあり、あのカメハメハ王朝が栄えた町として知られる所である。その町の郡保安官ライト・グレゴリの物語が、“The Sheriff of Kona”である。「さよなら、ジャック」と「ハンセン病患者クーラウ」は拙訳を発表しているが、この作品の翻訳には手をつけていないので、物語のプロットを少し丹念に追ってみる。

書きだしからいきなり、コナ海岸の賛辞が始まる。語り手は当地のジョン・カドワースという男の家に寄宿しており、2人がヴェランダでの食事を終えてから、カドワースのほうがかコナ海岸の気候を絶賛する場面がそれこそ連綿と続くのだ。彼は、

And I warn you, if you have some spot dear to you on earth, not to linger here too long, else you will find this dearer. (p.193)

とまで冒頭に言いきる。要は、この世にこんなにすばらしい所はないというわけだ。

次には、風の話。吹き方によって微妙に変わる風を意味する語の豊富なこと。winds や breezes は言うまでもないとして、zephyrs（そよ風、軟風）や sighs（そよぎ）から the mildest,

softest whiff of ozone や kisses of the breeze 等まで、優しい風を表わすのに実に手のこんだ表現を駆使しているのだ。そして語り手も、まさに“A lotus land”（「逸楽の国、桃源郷」）だと同調する。ギリシャ神話に出てくるロトスだ。最初からまる6ページにもわたってコナの気候の良さと優しい風のことを甘美で冗漫に語られ強調されると、読者は多少辟易してしまう。

ここに来て、カドワースの最大の親友だった別の男のことが話題にのぼる。8ページ目に入ってようやく、その男が“The Sheriff of Kona”だった、とタイトルが登場する。そして、その郡保安官——ライト・グレゴリ——がハンセン病患者だったというのである。生粋のアメリカ人で、背丈は190センチもあり、体はすこぶる頑健で、“He was the strongest man I have seen. He was an athlete and a giant. He was a god……”（p.201）とまで言いきり、いわば超人的存在だったののである。そうして病の症状が少しずつ現われていった。……その後においてもさらに“He was a great, glorious man-god.”（p.204）と、さまざまな例を挙げながら、超人のイメージが重ねられていく。

ポーカーをやったときの長話にしても、ライトの勝ち・勝負強さ等が強調されながら進む。以下、幸せな結婚のこと・子供たちのことと続いたところで、病が姿を現わすというわけだ。まったく皮肉なことに、ハンセン病患者を見つけては彼らをモロカイに送りこむのが彼の仕事の1つだったののである。混血のカルーナという男の指摘、

“‘It is no joke,’ Kaluna repeated. ‘You are a leper, Lyte Gregory, and you’ve no right putting your hands on honest men’s flesh — on the clean flesh of honest men.’”（p.220）

に対するグレゴリの憤激と動転に、当時のあからさまな一般状況が見てとれる。彼は細菌検査を受けにホノルルへ行き、やがてモロカイ送りとなる。駐在の医師の便りによると、彼は見る影もなく変わり果てているという。半年ほど経ってカドワースは、面会に行く。さらに3カ月のちには、居たたまれなくなって、アヘンの密輸船をチャーターし、仲間とともに大変な難儀のなか9カ月間居留してすでにハンセン病の進行のために見るも無惨な形相に変わったグレゴリを救い出し、上海へ送ったという。そして結末は、カドワースが上海へ行く語り手の「私」に依頼する言葉で終わる。少々長いが、引いてみる。

“You’re going to Shanghai. You look Lyte Gregory up. He is employed in a German firm there. Take him out to dinner. Open up wine. Give him everything of the best, but don’t let him pay for anything. Send the bill to me. His wife and the kids are in Honolulu, and he needs the money for them. I know. He sends most of his salary, and lives like an anchorite. And tell him about Kona. There’s where his heart is. Tell him all you can about Kona.”（pp.231-2）

以上が、「コナの郡保安官」のあらまし（超人さながらのコナの保安官ライト・グレゴリと、ハンセン病に冒されてなす術もなしとなる彼の顛末）である。何という痛切な悲劇であろう。偶然なのか意図されたものなのか、物語は全体のちょうど半ば（pp.193-211とpp.211-231）で急転する。つま

り、“And there it happend. The mark of the beast was laid upon him.” (pp.211-2) を境目に、それまでの平穩・安泰・順調・成功・健康・幸福といった申し分のない状態から、その正反対のどん底状態へと反転してしまうのである。上記の通りたしかに、最初の8～10ページ (pp.200-3) のあたりにグレゴリがハンセン病患者だったことに触れられてはいるものの、とにかく前半はライト・グレゴリの幸運・強運が圧倒的である。

ところで筆者は、「さよなら、ジャック」を一読した際もそうであったが、この「コナの郡保安官」を一読したときには作者の言わんとするところがさらに容易に把握しかねた。実際、優れたロンドン研究者であった故ラス・キングマン (1993年12月死去) 夫人のウィニフレッド・キングマン (彼女もロンドンの作品に通じていた——2006年9月死去) がまだ元気だった頃に、次のような便りを書き送ったことがある。

…… I cannot think that this is an excellent story in comparison with “Koolau the Leper” and “Good-by, Jack.” Especially the first half of it is rather tiresome. Could you tell me the significance and interesting points of the story? (2003年5月6日付)

すると、これに対する彼女の回答は、

I agree that Koolau the Leper and Good-by Jack are both far superior to The Sheriff of Kona, which seems to me to take in too much of the man's life. There is a lot of unnecessary detail which takes away from the point of the story. I never did really care for this one. (2003年5月20日付)

というものであった。2つめの文などは、筆者の1, 2度程度の読後感と響きあうと思われる。

ところが、くり返し読みかえずにつれ、「ストーリーの要点から外れた余計なところが多すぎる」という彼女の指摘あるいは筆者の1, 2度程度の読後感と違って、筆者の意図が鮮明に浮かびあがってきた。なるほど冗長に過ぎる傾向がとりわけ前半に認められることも事実だが、上述の最初の6ページにもわたるこの上ない気候・風およびライト・グレゴリの超人的人物像についての描写は、そういう背景やそうした人物をも含む誰の身にも突如として起こり得る不運・不幸を暗示し、大嵐の前の不気味な静けさとしてあるのだ。そして、後半が生き地獄の展開を見せるだけに、両者の天と地ほどの対照がいつそうきわ立つ効果をあげていることになるのである。

IV

最後に、“Koolau the Leper” (「ハンセン病患者クーラウ」) を見てみよう。雑誌掲載は1909年の12月で、*The Pacific Monthly* (Vol. 22, pp. 569-578) においてのことであった。ハンセン病患者の悲劇を真正面から捉え、鮮烈なまでに作品化してみせたことの意義は、計り知れないものがある。

主人公は、タイトル通りハンセン病患者のクーラウである。舞台は、ハワイ諸島の最北に位置

するカウアイ島。この島で生まれこの島をこよなく愛するクーラウが、ハンセン病を患っているために、彼を捕らえてモロカイ島送りにしようとする警官隊や兵士たちに追いつめられる。仲間のハンセン病患者たちを殺されたり、残った仲間にも裏切られ降伏されてしまうなか、彼だけは命がけで徹底抗戦し、最後は自らの「意のままに生きて、意のままに死んで」（p.185）いくという物語だ。

クーラウという人物は、実在したようである。

Based on an incident in Hawaiian history. London perhaps first heard of Koolau from Herbert Stolz on the *Snark* voyage in 1907. Koolau had killed Stolz's father, a sheriff in the famed Kalalau Valley.¹⁴⁾

アーサー・G・デイの場合は、

The true adventures of the real Koolau are in some ways more astounding even than the figure of London's creation.¹⁵⁾

と書きはじめ、かなり詳細にその実態を記している。

……He did murder Deputy Sheriff Louis H. Stolz, and did withstand a company of National Guardsmen armed with a Krupp gun. For three years Koolau, his wife Piilani, and their young son hid in the valley. Then the child, who had been infected with leprosy, died and was buried by the grieving couple. Two months later Koolau died, and was buried in a grave overlooking the valley of his exploits, in a grave hacked out beneath a cliff by Piilani with a small knife. The outlaw was dead, but his legend had just begun, and will be perpetuated for a long time by chatty tour guides.¹⁶⁾

彼の妻と幼い子供までも巻きこんだ何ともむごいものだったようだ。ただしデイは、この一節に続けて、

The differences between the fiction and the true story are not important. London had created another tale on his favorite theme — the defiance of a strong man who feels that his cause is just and who will never give in unto death.

と書き添えている。重要なのは、小説と事実の相違などではなく、ロンドンが得意のテーマに基づいてあらたな物語を創造した点にあるという。すなわち、かたくななまでに自らの大義なり信念なりを押し通し、それに生命を賭する強い男の挑戦・反抗というテーマである。

内容も場所も異なるが、こうした出来事はよくあったようである。Ⅱ章でも引用した書物にも、こんな例がある。

……患者は反抗を企て、ホノルルはこれを抑えるため警官を送ってよこした。患者はただれた傷口を武器にして、これに抵抗した。警官のひとりには、腐れた腕で抱えられ、膿を皮膚になすりつけられた。これにはさすがの警官たちも足がすくんだ。……

この間、ハワイ各島にはハンセン病が増えるいっぽうであり、1873年1月、隔離政策に熱心なルナリロが国王に即位した。……検疫隔離の法律はさらに強行されることになった。……しかし、モロカイ島の評判は、この法律をますます不人気なものにした。人情にあついハワイ人は、親、兄弟、配偶者を、なぜこの世の地獄のような隔離地に送り込まなければならないのか、その理由が承知できなかった。それゆえ、法律を強行しようとすればするほど、患者の家族はいっそう抵抗し、数千の患者は山中の小屋に立てこもり、……¹⁷⁾

多少はしょって引用してみたが、クーラウのような話など実際にあったのか？と首をかしげる向きにも首肯できる事実例の指摘であると言えよう。しかも、この引用の時代は1873年であり、クーラウの事件はさらに20年後のことなのである。そうした数多くの類例が現にあったことによって、一徹な患者たち、とりわけクーラウの生きざまも現実味を帯び、きわめてリアルに読者に迫ってくるのであろう。

もう1点指摘しておかねばならないのは、「さよなら、ジャック」でも言及されていたが、ハワイを牛耳る者たちのことがこの作品にも言及されている——それも、クーラウ自身に語らせている——ことである。それは、作品の書きだしから始まっている。

「俺たちが病気だから、連中は俺たちの自由を奪いとるのだ。俺たちは、法に従ってきた。何も悪いことなんかしていない。なのに、俺たちを監禁しようとする。モロカイは、監禁所だ。……」(p.172)

連中とは、無論白人のことである。

「……連中には2種類おった。そのうちの1つは、俺たちに神の言葉（キリスト教のこと）を伝道する許可、恵みあふれる許可を求めた。もう1つのほうは、俺たちと貿易する許可、恵みあふれる許可を求めた。それが、事の起こりだった。今日では、島はみな白人のものだ。……何も持っていなかったやつらがすべてのものを持ち、君らにせよ、俺にせよ、あるいはどんなカナカ人（ハワイおよび南洋諸島の先住民）にせよ腹が減ったら、やつらはあざ笑って、こう言うのだ。『おやおや、働いたらどうだ？ ^{プランテーション} 栽培場があるぜ』」(p.172)

作者がこうした歴史的推移をも認識・把握したうえでクーラウの物語を創造したことに大きな意味があるだろう。ちなみに、中田幸子氏も次のように書いている。

余談であるが、日本から仏教がハワイへ渡ったのはキリスト教に遙かに遅れるが、これは日本人移住者を対象に島々へ上陸した。これに対し、既に明らかなように、キリスト教は白人の1人もいない土地へまず侵入し、現地人相手に自分らの神の言葉を伝え、同時にその土

地すべてを所有し支配したのである。彼らの宗教は力と直結している。¹⁸⁾

「ハンセン病患者クーラウ」の中ですこぶる印象的・暗示的な場面が2通りある。1つは、南国特有の自然描写だ。「燃えるようなハイビスカスの花の冠」(p.172)から始まって、「馨^{かぐわ}しい明るい夜のもと、花冠を戴^いて……」(p.173)、「花々に満ちた峡谷」(同ページ)、「三方にはすごみのある壁がそびえ立ち、そこを風変わりな柔らかい織物の優美なひだのような熱帯植物が花づなのごとくおおい、……」(同ページ)等々、強い香気にむせ返るような場面に、「何千年も地獄で拷問にかけられた生き物の外観を呈して」(同ページ)いるハンセン病患者たちが30人ほどもいる。しかもそれらの外観が、これでもかこれでもかと言わんばかりに描き足されていく。何というインパクトの強いコントラストであろう。このはなはだしい落差が暗示するものは、言わずもがなであろう。

もう1つは、やはり警官隊や兵士たちとの駆け引き・決死の攻防もさりながら、その舞台となったカララウ谷の崖っぶちである。

カララウ谷の遠く離れた崖っぶちが隠れ家として選ばれたのは、適切であった。険しい崖を登ってもと来たところへもどる道を知っているキロリアーナのほかには誰も、やせ尾根越えに進む以外に、峡谷までたどり着くことはできなかった。この抜け道は、長さが100ヤード(約90メートル)あった。幅はというと、せいぜい12インチ足らず(約30センチ)だ。両側ともに、深い淵が大きく口を開けている。右にせよ左にせよ踏みはずしでもすれば、死の手中に落ちるだろう。それでもいったん越しさえすれば、そこはこの世の楽園というわけだ。…… (p.176)

そしてその後のやり取りや攻防で、保安官代理や警官隊のうちの3人が墜落の憂き目にあうさまは、すさまじい。何しろ150メートルも落下するのだから。さながらアクション映画を観るようだが、ただのアクション映画どころでないところが読者の想像力にただならぬ重圧をかける。

最後に、このやせ尾根越えの話は、実はロンドンの自伝的物語『マーティン・イーデン』(Martin Eden, 1909)でもよく似た形で触れられている。主人公のマーティンが、ハワイ諸島を巡った自らの体験を恋人のルース・モースに話して聞かせる場面だ。

「……スクーターを脱走して、浜辺に上陸すると、どこか隠れ場はないかと内陸部へ進んでいったんです。3日間、バンジロウやアレー^{りんご}林檎やバナナばかり食べました。どれも、ジャングルで自然に育っているんです。4日めに間道^{かんどう}——人が踏みつけただけの小道——が見つかりました。それは、内陸部へと続いていました。僕の進みたい道だったし、まだ歩いて間もない跡が残っていました。その道は、ある所ではナイフの刃ほどしかない山の背の頂上づたいにありました。頂上では幅が3フィートもなく、その両側は何百フィートという深さの絶壁になっていました。弾薬が十分にさえあれば、人1人で10万人を向こうにまわしても持ったでしょう。……」¹⁹⁾

そういえば、『マーティン・イーデン』が書きはじめられたのは、1907年の夏、奇しくもハワイはホノルルにおいてのことであり、脱稿したのは翌年2月、タヒチ島のパーピエテイでのことであった。

V

世界各地に赴き、さまざまな事象をつぶさに目のあたりにしたロンドンには、先の拙稿および本稿で取りあげてきたように、ハンセン病患者たちとその問題にも真正面から向きあった。何といっても時代が時代であっただけに、幾多の障害・困難が立ちはだかった。が、自らの体験としては『スナーク号航海記』の“The Lepers of Molokai”を書いたし、直接ハンセン病患者を扱った作品（purely fictional stories on leprosy²⁰⁾）としては本稿で取りあげた3篇を残した。しかも、これらはすでに見た通り、実際に聞いたおびただしい数のハンセン病患者たちの話を題材にして書いた3篇にすぎない、と自ら述べているのである。

時代状況と痛ましい作品内容のために、これら3篇の発表はかなりの物議をかもしたようである。

After his departure, the publication of the three stories aroused a tempest in the Honolulu newspapers. He was assused of making the world think that everybody in Hawaii was a gruesome leper. One letter signed “Bystander” termed London “a dirty sneak, a sneak of the first water, a thoroughly untrustworthy man, an ungrateful and untrustful bounder.”²¹⁾

一大観光地のいわば汚点ないしは腫れものを世界に公表するとは不屈き千万なり、と罵詈雑言を浴びせかけられた。ロンドン自身も、こうした大騒動が巻き起こることを予期しなかったはずがない。それでもやはり、ハンセン病患者たちをめぐる悲惨きわまりない諸事実を彼一流の想像力を駆使しながら書き残しておきたかったのであろう。彼自身、やがてハンセン病も克服されることを確信していたからこそ、あえて勇気を奮ってペンを執ったのだ。

最後にもう1点記しておきたい。それは、ハワイをはじめ南太平洋の島々を巡ることによって、ロンドンが自らの人種観を軟化させていった点である。

……His prejudices had mellowed. His Chinamen were courageous and wise and sometimes wealthy, while miscegenation could produce admirable and beautiful people who made Anglo-Saxon bias look foolish.²²⁾

こうした例はいくつもの作品に見られるが、ハンセン病もので言えば、「さよなら、ジャック」のルーシー・モクヌイの描写などはその典型であるだろう。また、“stories of Polynesia, where the people were half children and half-gods in Jack’s eyes”²³⁾と見たロンドンの視点もある。さ

らに彼の視座は、短篇「椿^{チュン・アーチュン}阿春」のように、壮観とも言えるグローバルな多民族社会を扱った作品群へと大きなうねりと広がりを見せていくのである。

注

- 1) 『立命館経済学』（第53巻・第2号, 2004）, pp. 73-93.
- 2) 『立命館経済学』（第56巻・第2号, 2007）, pp. 28-43.
- 3) Elizabeth McCrossan, “On Tour: The Hawaiian Fiction of Jack London” (*The Call: The Magazine of the Jack London Society*, Fall / Winter 2005), p. 3.
- 4) *Jack London First Editions* (Star Rover House, 1979) なお、筆者も *The House of Pride and Other Tales of Hawaii* を所蔵しているが、1913年9月3刷のものであり、表紙の色は暗赤色である。初版のものは、シダ類の緑色 (Fern Green) が基調であったという。
- 5) Russ Kingman, *Jack London: A Definitive Chronology* (California: David Rejl, 1992), p. 79.
- 6) 拙稿「ハンセン病問題とジャック・ロンドン」(『立命館経済学』（第56巻・第2号, 2007）, pp. 37-41.
- 7) *Letters from Jack London*, edited by King Hendricks and Irving Shepard (New York: Odyssey Press, 1965), p. 310.
- 8) Russ Kingman, *op. cit.*, p. 90.
- 9) *Stories of Hawaii by Jack London*, edited by Arthur Grove Day (New York: Appleton-Century, 1965), p. 11.
- 10) Jack London, *The House of Pride and Other Tales of Hawaii* (New York: The Macmillan Company, 1912), p. 103. 邦訳は、拙訳書『決定版 ジャック・ロンドン選集6』（本の友社, 2006）, p. 152. 以下, “The Sheriff of Kona” からの引用は原文の、それ以外2篇の本拙訳書からの引用は各引用文のあとに、ページ数をもって示すこととする。
- 11) 小田部胤著『救ハンセン病の使徒 ダミアン神父』（サンパウロ, 1993）, p. 209.
- 12) 同上書, p. 92 および p. 100.
- 13) 中田幸子著『ジャック・ロンドンとその周辺』（北星堂, 1981）, p. 252. さらに敷衍すると、別の書物（池上H出夫著『アメリカ 不服従の伝統—「明白な天命」と反戦』（新日本出版社, 2008）, p. 116）に次のような記述が見られる。「アメリカでは、海外諸国の「文明化」政策を推進するために、すでに1810年に、国外の「野蛮な異教徒」をキリスト教徒に改宗させる特別の組織が公的に設立されていた。この組織を構成する宣教師の5分の1が、ハワイに派遣されていたといわれている。彼らはニューイングランドの保守的なキリスト教徒であり、ハワイでは原住民の支配層を巧妙に取りこむ作戦を展開し、一方で原住民にたいしては、権力には絶対服従の厳しい戒律を教えこんだ。……」
- 14) *The Fiction of Jack London*, compiled and annotated by Dale L. Walker & James E. Sisson III (Texas Western Press, 1972), p. 20.
- 15) Arthur Grove Day, *op. cit.*, p. 11.
- 16) *Ibid.*
- 17) 小田部胤, 上掲書, pp. 91-2.
- 18) 中田幸子, 上掲書, p. 253.
- 19) Jack London, *Martin Eden* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1965), p. 208. 邦訳は、拙訳書『ジャック・ロンドン自伝的物語』（品文社, 1986）, pp. 221-2.
- 20) Arthur Grove Day, *op. cit.*, p. 10.
- 21) *Ibid.*
- 22) Andrew Sinclair, *A Biography of Jack London* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1978), p. 178.
- 23) *Ibid.*, p. 179.